

フルーツを 楽しむ

もぎ
たて

家庭で育てる果樹講座



元・園田学園女子大学教授 西谷 好一

イチジク(タヌ科)

プロフィール

イチジクの原生地は、アラビア南部の肥沃な地帯だといわれています。農耕が始まって間もない紀元前5000年ごろから、野生のイチジクが利用されていたものと思われます。

その後、北上してシリアやトルコに伝わり、次いでギリシャ、イタリアへと広がっていきました。紀元前2000年ごろのギリシャでは、野生のイチジクと栽培のイチジクに分かれていたようです。また、エジプトでは紀元前2500年ごろ、すでにブドウとともに大規模に作られていました。

中世になると、アラビア人によって、トルコ、シリアからスペイン、ポルトガル、モロッコなどにもたらされ、乾イチジクの栽培が盛んになりました。アメリカへは、16世紀にスペインからの移住者によって伝えられ、カリフォルニア州で栽培が広まっていきました。

日本では、イチジクと同属のイヌビワはありますが、イチジクは原

生していませんでした。日本に伝わったのは中国からという説と、寛永年間(1630年)に西南太平洋諸島からという説の二つがありますが、定かではありません。昔からあるイチジクが「唐柿」とか「蓬菜柿」と呼ばれているので、もしかすると中国から伝わったのかもしれません。

明治・大正になるとアメリカから新しい品種が導入され、本格的な栽培が始まりました。太平洋戦争でいったんは消滅しましたが、現在は戦前の水準に戻り、ハウス栽培も見られるようになりました。

日本のイチジクは、多湿気候の関係からほとんどが生食用で、欧米での乾果用の大栽培と違って小規模な栽培です。最近では、家庭果樹としても広く作られるようになっていきます。

生育の特性

イチジクは亜熱帯性高木落葉果樹で、環境条件がよければ高さ20m、幹周2〜3mもの大木になります。筆者はこのような大木を、モロッコのカサブランカで見えてびっくりしたことがあります。

イチジクは植え付け後2年目から収穫できますが、多湿の日本では寿命が短く、盛果期間は7〜15年程度



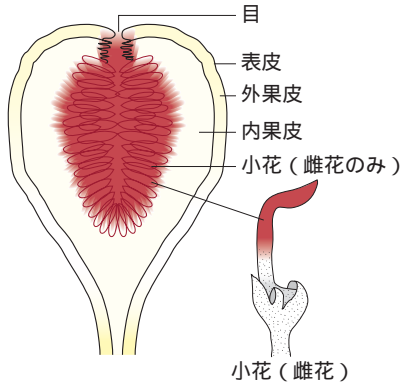
1 フラガの果実。

です。葉からの蒸散が多いので吸水量も多く、しかも根が比較的浅いので、果実の肥大するころに乾燥害が発生しやすくなり、注意が必要です。根は酸素要求が強く耐水性が弱いので、水分が豊富でしかも水はけのよい土が必要です。

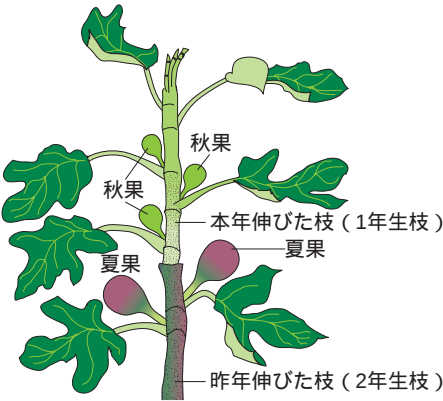
果実は、新しく伸びた枝の節ごと(基部2〜3節を除く)につき、下から順番に熟していきます。これを秋果といいます。先端近くの花芽は、温度不足により生長をストップして休眠に入ります。春がきて暖かくなると再び生長を始め、6〜7月に成熟します。この果実を夏果といいますが(第2図)。

果実は、初期の盛んな生長の時期を経て、中期の内容充実期に入ります。収穫の15日くらい前になると、

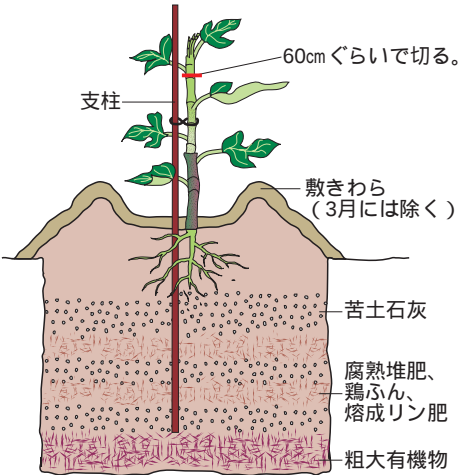
第1図 イチジク果実の断面
(榊井ドーフィン)



第2図 夏果と秋果



第3図 イチジク苗木の植え付け



栽培

1 苗木と植え付け

通常は挿し木苗を植え付けます。

欧米でのイチジク栽培の歴史は古く、数多くの品種がありますが、ほとんどが乾果として利用されています。日本では気候や食習慣の関係で、乾果としてはなく生食に供されません。ただ、生食用の品種は数が少なく、品種改良もほとんど進んでいません。経済栽培には「榊井ドーフィン」が主に使用されており、その他では昔から作られてきた「蓬萊柿」がわずかに栽培されているぐらいです(第1表)。

品種

第1表 イチジクの代表的品種

	品 種 名	樹勢	樹形	果実大きさ	果形	果皮色	果肉色	品質	収量	収穫期	備 考
夏果専用	サンペドロホワイト	強	開張	大	円	黄緑	白	極上	稍少	6月下旬～7月中旬	果頂が割れやすい。
	バイオレードフィン	強	開張	大	短卵円	暗紫褐	こはく	極上	多	6月下旬～7月上旬	フランス原産。
秋果専用	蓬萊柿	強	立性	中	短卵円	薄赤紫	鮮赤	中	多	9月上旬～11月上旬	在来種で、耐寒性強。
	アドリアチック	強	開張	大	卵円	帯緑黄	濃赤	上	中	8月中旬～10月下旬	イタリアの古い品種。
夏秋果兼用	榊井ドーフィン	中	開張	夏果 大 秋果 大	長卵	紫褐	淡紅	中	多	夏果 7月上旬～8月上旬 秋果 8月中旬～10月下旬	経済栽培用品種、カリフォルニアから導入。
	ブルンスウィック	中	開張	夏果 大 秋果 中	長卵	黄褐	赤褐	上	中	夏果 7月中旬 秋果 8月中旬～10月中旬	ホワイトゼノアと誤称されていた。
	カドタ	強	立性	夏果 中 秋果 中	卵円	帯緑黄	薄紫	極上	中	夏果 7月上旬～8月上旬 秋果 8月上旬～10月上旬	ドットアートの異名がある、イタリアの主力品種。



1 貯蔵しておいた挿し穂を3月に挿し木する。

2〜3年生の、丈夫な枝でしっかりと芽をつけ、細根が多く、虫瘤のついていない苗木を選びましょう。

地下水位が低く、排水のよい場所に、幅1m、深さ0・8mぐらいの大きな穴を掘って、完熟堆肥と土、肥料を交互に埋め戻します。

20cmぐらい盛り土をしてから苗木を植え付けます。根元に灌水と敷きわらをしてから、苗木を60cmぐらいに切り返しておきます。

植え付け時期は12月ですが、寒い地域や冬の乾燥の激しい所では3月にします。株間は開心形で5×5m、一文字形なら5×2mにします(58頁第3図)。

2 芽かき

芽かきは、芽の段階で将来の枝を間引くことで、枝の過繁茂を防いで果実の肥大や着色、糖度を高めたり、樹間の通風や透光をよくして病気の発生を少なくするのが目的です。

第1回目は5月上旬、葉数が2〜3枚、5〜6cmに伸びたところに行います。第2回目は6月上中旬で、葉数が7〜8枚、20cmぐらいに伸びたときに行うようにします。芽(枝)かきをすることによって、芽(枝)

と芽の間隔が最終的には30cmになるようにします。ひこばえや不定芽はすべて切除します(第4・第5図)。

3 灌水

イチジクの根は酸素要求が強いので、地下水位の高い所や排水の悪い粘土質の所では、根の張りが浅く、夏の乾燥期には干害を受けて枯れてしまします。このような場所では排水対策が先決で、明渠や暗渠を設けて排水し、根の広がる範囲を深く、広くしないと木は育ちません。

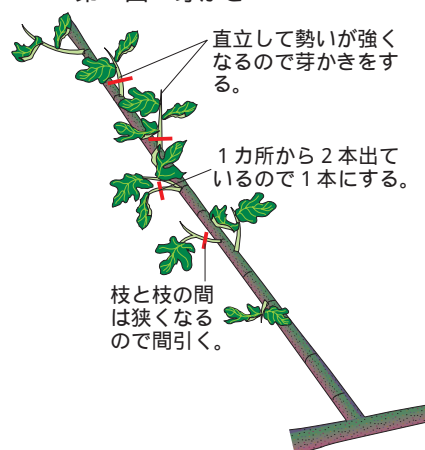
排水対策の完了後、敷きわら(草)をして、7〜8月は1週間ごとに灌水をします。成木1本当たり1回に30〜40ℓ灌水します。

4 施肥

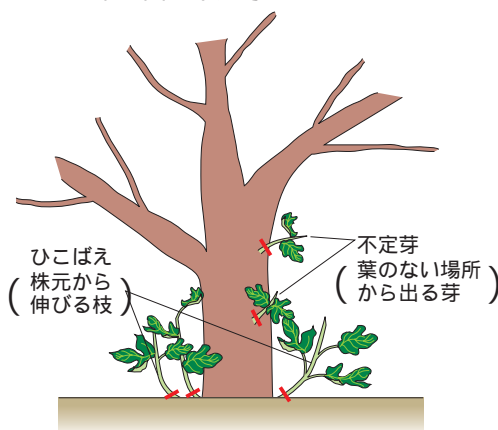
イチジクは、発芽から収穫までに4カ月、収穫が始まってから終わるまでに2カ月を要します。そのため、肥料の吸収が長く続くことを考慮して施肥を行います。

元肥は、11月の落葉後から12月いっぱい、少し寒い地方では12月と2月に分けて与えます。有機質肥料を主体にして、肥効が長続きするようにします。石灰の吸収が多いので、苦土石灰を十分に施します。夏肥は果実の肥大・成熟をよくするために、6月から8月の間に2〜3回に分け

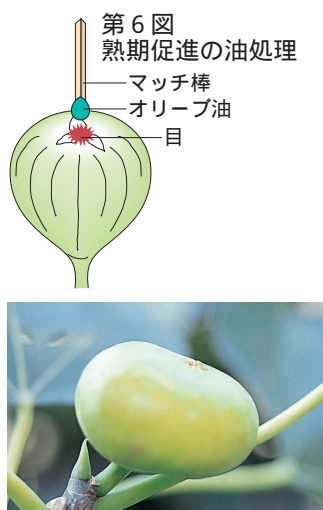
第4図 芽かき



第5図 不定芽とひこばえ



第6図 熟期促進の油処理



↑「サンペドロホワイト」。

第3表 イチジクの生育経過と主な作業

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
生育経過	休眠期			発芽	枝伸長			肥大・成熟期			休眠期	
主な作業	剪定	元肥		芽かき・間引き			夏肥	夏肥	秋肥	収穫		

第2表 イチジクの施肥計画例

(成木1本当たり量kg)

肥料 施肥期	鶏ふん	高度化 肥料	熔成 リン肥	苦土石灰	積み肥	施肥目的
12月上中旬 と 2月下旬	4.5	-	0.2	-	20.0	元肥、有機質肥料 主体 2回に分けて2分の 1ずつ施す
6月上旬 と 8月上旬	2.4	0.5	0.3	-	-	夏肥、果実の発育 と枝の充実 2回に分けて2分の 1ずつ施す
9月上旬	0.8	0.2	-	-	-	秋肥(お礼肥)、 樹勢回復と養分 貯蔵

また、生食以外では、ジャムや冷果（シャーベット）にしてもおいしくいただけます。

6 熟期促進（油処理・オイリング）
熟するのを7～10日程度早くする



↑「梣井ドーフィン」

に施します。チッソは抑えてカリを多く与えます。秋肥はお礼肥ともいわれ、収穫後の樹勢回復と、翌年の生長をよくするために施します（第2表）。

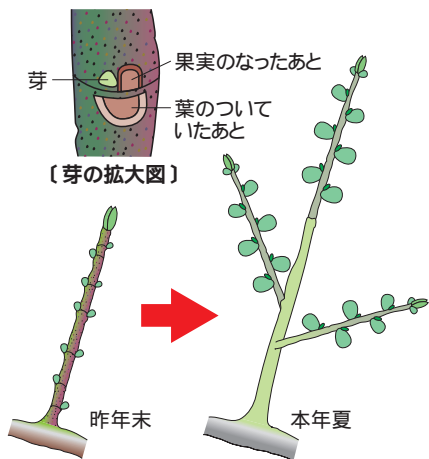
5 収穫
品種によって、秋果だけ収穫するもの、夏果だけのもの、秋果と夏果の両方を収穫できるものがあります。家庭の場合は、十分着色し、軽く触れたときにやわらかく感じられるようになるまでならして、日をおきましよう。収穫後の果実は、傷みや早く日もちしません。できるだけ早朝気温が上がらないうちに収穫するようにします。



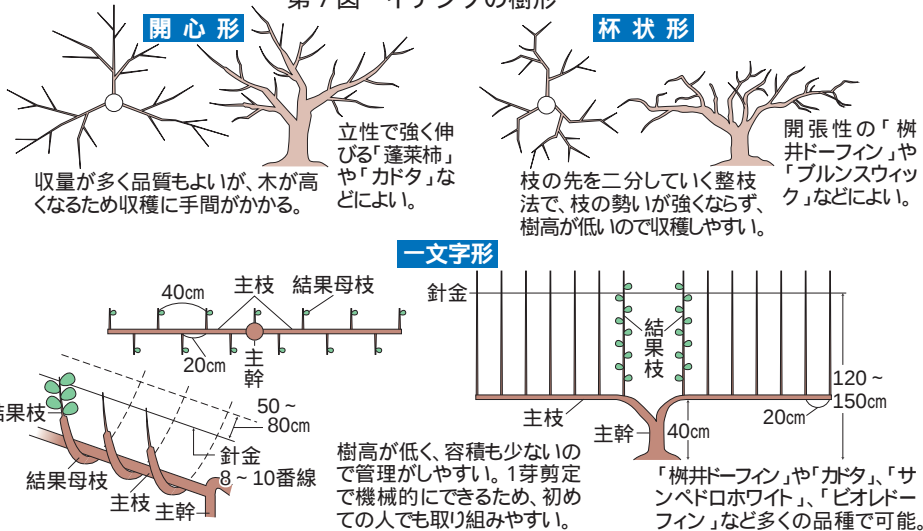
方法です。果実が大きくなり、緑色がやや黄色みを帯びて、頂部の目の周囲が赤くなってきたところに、オリブ油を1滴、目の上に落とします。油はサラダ油でもかまいません。ただし、一度に多くの油処理をすると、樹を弱らせることになり効果的ではありません。1本の枝につき1個にします（第1・第6図）。

7 整枝・剪定
イチジクは収穫が長く続くので、作業が楽にできる樹形が要求されます。開張性のある「梣井ドーフィン」なら、杯状形や一文字形が適しています。充実した枝であれば確実に各節に結果しますので、弱い枝や強すぎる徒長枝は間引くようにします。交差したり、混み合ったりしている枝は、間引くか切り返すかして空間をつくります。夏果のなる品種は、先端を切り返さずそのままにします。時期は、12月～1月が適しています（第7・第8・第9図）。

第8図 イチジクの結果習性（果実のなり方）



第7図 イチジクの樹形



第4表 イチジクの病虫害と生理的障害

疫病	土中に存在する病菌が、はねあがった雨によってイチジクに伝染し、枝や葉、果実に発病する。果面を白いカビがおおい、軟腐させる。土の表面に敷きわらやビニールマルチをする。6～7月にボルドー液を散布する。
ネコセンチュウ（ネマトーダ）	根に寄生して虫コブをつくり、樹液を吸うことで木を衰弱させる。有機物を土に多く施して木の生育を強くし、耐病性を高める。虫コブが多数ついていときは、木を抜いて焼却する。ネマモールを1㎡当たり2ℓ灌注する。
カミキリムシ	クワカミキリの加害が多い。幼虫が樹幹内に侵入して内部を食害し、木を弱らせる。結実不良となり、枝が強風で折損しやすくなる。成虫が7～8月に出てきて枝に産卵する。成虫を捕殺し、卵を見つけてつぶす。
連作障害（忌地）	同じ場所にイチジクを連作すると、新しい木の生育を害し、ひどいときは枯死する。前作の残根の分解物による作用や、ネマトーダの多発によって起こる。残根の除去と客土、ネマトーダの駆除が必要。連作しないこと。

第9図 細部の剪定



1. 徒長枝だが周囲に枝が少ないため短く切り返しておく。新しい枝が伸びてくる。
2. 徒長枝は元から間引く。
3. 下垂枝は間引く。
4. 主枝に近いので間引く。
5. 主枝の延長枝は少し長くして、5～6芽くらいで切り返す。
6. 普通3～4芽残して切り返す。
7. 弱い枝は1～2芽残して切る。
8. 枝が混雑するので間引く。